女子サッカーにおける得点シーンの分析

Analysis of scoring scene in women's soccer

1K10C137-4　岸川奈津希
主査　堀野博幸　　副査　石井昌幸

【目的】

2011 年 FIFA 女子ワールドカップドイツ大会において，日本女子代表は，身体能力で上回る相手に対してテクニック，組織力，運動量など日本の長所を活かした戦いで世界を驚かし，優勝という結果を残した．しかし，守備が組織化され，強固なものとなってきている現代サッカーにおいて，如何にして得点を奪うかということは日本女子代表の課題の一つである．男子でも得点力不足は課題として挙げられていて，男子，女子の共通の課題といえるが，女子選手を対象とした得点や攻撃に関する研究は少ない．そこで，本研究では女子選手を対象に，どのようなプレーやエリア，状況によって得点が生まれるのかを分析することを目的とした．

【方法】

1. 分析対象

プレナスなでしこリーグ 2012 及び 2013 シーズンの全 180 試合における，全 460 ゴールを対象とした．

2. 分析手順

プレナスなでしこリーグ 2012 及び 2013 シーズンの全試合映像をゲーム分析ソフト DART FISH Team Pro（ダートフィッシュ・ジャパン）を用いてゴールシーンを抽出した．抽出した映像を視察により，以下に示す 11 の分析項目から自作のシートに記録し，集計した．

3. 分析項目

アシストから得点もしくはこぼれ球から得点に至るまでの過程の要素として， 11 の項目を設定した．

4. 統計処理

全ての分析結果においてχ^2検定を用いた．有意差，または有意傾向がみられた場合には，多重比較法を用いて検定を行った．

【結果】

1. 得点シーンの内訳

全 460 ゴールの 83%とある 384 ゴールがインプレーからの得点であった．

2. 得点者のタッチ数

χ^2検定の結果，有意差が認められ，1 タッチでの得点が 303 ゴール，2 タッチでの得点が 90 ゴールと大きな差がみられた．

3. シュートに用いた部位

インサイドとインステップでの得点が有意に高い値を示したが，この 2 つの間には有意差は認められなかった．

4. シュートの球種

グラウンダーとライナーが，他の球種と比べ有意に多かったが，この 2 つの間には有意差は認められなかった．

5. 得点者のファーストタッチの方向

後ろ向きファーストタッチからの得点より，前向きファーストタッチからの得点の方が明らかに多かった．

6. シュート位置

アタッキングサードでの得点が有意に多く，アタッキングサードの中でも，ペナルティーエリア内での得点が最も多かった．

7. 攻撃，守備に関わった人数

1 人もしくは 2 人少ない数的不利の状況での得点の方が数的同数，数的優位に比べ有意に高い値を示した．

8. アシスト者のタッチ数

1 タッチアシストからの得点，アシスト無しからの得点の 2 つが有意に多くみられた．

9. ラストパスの球種

アシスト無を除き，グラウンダーとライナーでのアシストが有意に多かった．

10. アシストの位置

アタッキングサードからのアシストによる得点が有意に多かった．

11. 攻撃の形

攻撃の形は 15 の形に分類され，アシスト無を除きクロスからの得点が有意に多かった．

【考察】

本研究の結果からわかったことは，得点を奪うためにはシュートを打ちやすい状態でペナルティーエリアに侵入することである．その方法として，クロスが最も多かったが，ラストパスが不正確では得点を奪うことは難しいだろう．少ないタッチ数でシュートが打てる正確なラストパスが求められる．得点者は強いプレッシャーの中でも，冷静な判断と，正確なシュートを打てるテクニックを身につける必要がある．そして，常にシュートを狙えるポジショニングとこぼれ球への反応を速くすることも重要である．

数的優位の状況で失点が多いということは，守備の対応の悪さも原因の一つだろう．本研究では得点シーンに着目して分析を進めたが，守備の課題も垣間見えた．